

会計学科創設 40 周年にあたっての回顧

専修大学名誉教授 松原 成美

本年、専修大学商学部会計学科が創設 40 周年を迎えるに当たり、何か寄稿をと関根孝商学論集編集委員長よりお声をかけていただいた。昨年 3 月に定年退職を迎えた身ではあるが、入職当初に見聞きしたことなど、今でも憶えていることをこの機会にいくつか記しておきたいと思う。

1. 会計学科設立の経緯

本学が古くより「計理の専修」の名で呼ばれていることは知られているが、その評判は、昭和 27 年に開設された大学の付属機関である会計学研究所に起因する。その当時、計理士制度から公認会計士制度に移行するための特別試験というものが存在していたが、それを受験するための講習会を本学会計研究所が開講しており、受講者の多くが 1 回目の受験で合格していたことから世間の評判となった。さらに、昭和 34 年には、同研究所の主催する夜間の会計学講座も開かれ、社会に開かれた大学としての名を高めた。この会計学講座は、本科と研究科の 2 つのコースからなり、期間は 6 ヶ月間で本科は週 3 回、研究科は週 2 回の講義があった。ちなみに、本科は経理指導者の要請を目的に日本商工会議所の簿記検定試験の各受験者を対象とし、対する研究科は主として公認会計士・税理士を受験するための講座として開講されていた。開講当初の講師陣には、当時のわが国の一流の会計学者が並んでおり、黒澤清・田島四郎・鍋嶋達・井上達雄その他の諸先生が担当されている。この当初の夜間の会計学教室は、神田校舎の全面改築に伴い閉講したが、現在は在学学生を対象とした簿記検定講座として生田校舎で学生の資格取得試験のために役立っている。そして、開講時の講師陣の中で、後年の本学会計学科設立に尽力される先生方も出たのである。

2. 会計学科設立初期に活躍された先生方

小生が前任校の千葉商科大学より本学に赴任したのは、昭和 43 年 4 月のことである。これは、商学部会計学科設立に伴う増員メンバーの一人として招聘されたと聞いている。着任当時の商学部長は、大塚光先生である。大塚先生は戦前の昭和 16 年から本学に奉職され、株式会社社会計を主に担当されていた。また、学部長としても優れた行政手腕を発揮

され、特に「和」を重視される学部運営をされていた。篤実なお人柄であったことが思い出される。さらに、大塚先生を支え、その後、昭和44年から52年まで4期連続で商学部長をされた澤田武先生のお名前も会計学科設立の尽力者として挙げたい。澤田先生は、本学出身であり担当された科目は簿記原理であったが、何事に関しても慎重にかつ的確に判断される温厚な先生であった。後年、長らく常務理事として大学行政にも貢献されている。

私の入職の3年後、昭和46年4月には、前述の鍋嶋達先生が東北大の定年退官に伴い本学に移られて、経営学・原価計算を担当され、会計学科はますます充実することになった。言うまでもないことだが、鍋嶋先生は我が国の原価計算基準の立案・制定に尽力された方でもある。鍋嶋先生なくして、本学大学院商学研究科修士・博士課程の設置はできず、いわば、商研の生みの親ともいえよう。図書館長・大学院商学研究科主任を歴任された。

続いて、昭和49年4月には国弘員人先生も同じく東北大学から本学に就任されている。専門は経営分析であったが、大学院では経営分析のほか資金会計論も担当されていた。昭和54年から大学院商学研究科主任をされ、商研発展のために尽力されている。誠実・温厚なお人柄であって、よく学生や若い同僚の面倒も見られた。個人的には、よく大学の帰りに新宿でお茶をご一緒したことを覚えている。この四方に加え、他にも先達を忘れることはできない。青山学院大からこられた土田三千雄先生には、会計理論を担当していただいた。佐藤精一先生は横浜国立大学から着任後、鍋嶋先生の後任として原価計算を担当された。石渡績先生は公認会計士として活躍されていた他、本学で税務会計を担当され、さらには後年商学部長も勤められた。諸先生が皆鬼籍に入られた今、往時を思い出し感無量である。

平成20年10月1日